



## 近道をしない

岡田 安弘

米国の絵本作家で園芸家、ターシャ・テューダ(1915-2008)の生涯を描くTV映画を観た。私が里山再生活動に参加したのを知った友人が、録画を届けてくれた。「後半生をかけた広大な庭や森は、世界中のガーデナーの憧れだよ」と言う。

ならやまの仲間は、写真集を貸してくれた。たわわに実るリンゴやミカンの森と花盛りの庭の写真が美しい。これらは子と孫に引き継がれた。映画では、幼い曾孫が池のスイレンを見て「お花はどのようにして生まれてくるの?」と親に聞く。自然の営みや自然との共生を親が教える。

ターシャの世界は知れば知るほど、木曜日の活動に重なって見えた。私たちも豊かな自然を守り、次世代へ引き継ぐのを使命にしている。自然教室や昆虫と植物の図録は、自然を慈しむ心を育むに違いない。図録「ならやまの木々」の編集も始まった。

近道を探さないことをモットーにするターシャ。ならやまの合言葉「無理をせず」にも通じ腑に落ちる。1日の大半を草花の手入れと山羊の乳しぼりに費やす。晩年の過ごし方の理想と言えよう。スローライフという和製英語が生まれたのは、ターシャの生涯が話題になってのことだそう。

< 牛を飼いたい >

社交界で引っ張りだこの両親とは対照的に、孤独な少女だった。農場を持って牛を飼うのを夢見る。本格的に園芸の道へ歩んだのは50歳を過ぎている。それも意外な人の影響だった。

電話を発明したグラハム・ベルの娘と親しかった両親が、ターシャに語った話がある。ベルはポケット一杯のルピナスの種を旅の先々で蒔いた。花が広がり米国の原風景になったという。

「私も種を蒔く」。少女は心に誓う。

20歳を過ぎて、絵本作家になる。幼いころから空想の世界で遊ぶのが好きだった。絵本の主人公は、飼っている山羊、子豚、ガチョウなど。空想を絵にする。大ヒットし、思う存分に種を蒔く時が訪れる。「しかし、夫とは歩む方角が異なり別れた」と告白している。

バーモント州の町外れに移り住む。30万坪の土地は石ころだらけ。開発に最新の重機は使わない。家族の手と年月をかける。ならやまも同じだ。荒山と竹藪の16haを県から預かり、諸先輩の手が何年もかけて切り開いた。

「料理と掃除は、女のアートとして楽しむ」とも語る。ならやまの季節の食材を使って振舞われる煮物、和え物、揚げ物、漬物、汁物やサラダが目につかんだ。

< 16歳から愛用 >

4人の子を育てた。コテージは長男の手造り。1940年代に購入した薪ストーブとベッドだけの質素な生活を始める。電気や水道などの設備は最小限に留め、主にローソク生活。1年に使う千本のローソクも手製。柳の枝に灯心を何本も結わえる。大なべに溶かした蜜ろうが固まるまで、子や孫が何回も漬けては上げる。

多くの古道具も現役。スコップは16歳からの愛用品だ。写真集で見る古ぼけた台所には、計量カップ、魚の蒸し器など古い調理具が並ぶ。「昔のものはよくできている。何十年も使っているわ」と話している。

曾孫がドライフラワーを手作りし、91歳の誕生日に手渡した。「いい香りがするだろうね。でも、もう嗅げないの」。申し訳なさそうに包みを開ける。鼻を近付けた。「やっぱり駄目だったわ」。映画は自然を愛した人のフィナーレを暗示する。

一枚の木の葉が散り、腐葉土となって母なる地球に還る。日本人的な死生観なら、人生は帰郷の旅と言えなくもない。自ら手を尽くした土に、ターシャは還った。93歳だった。